

新入生歓迎

ハイキングに参加して

新入生歓迎の意味で、嵐山——高雄のハイキングが日本文学研究会の主催で行われた。

四月二十九日午前十時、四条大宮に集合した私達は、正直にいつて体育の時間がもらえるという魅力にひかれて参加した。その気持ちの裏には、あまり親しくない人とハイキングをすることにたいする心細い不安もあった。嵐電で大宮から嵐山へ向つた。車中でポツリポツリと話をしているうちに、小学生の遠足の時のようなはなやいだ雰囲気になり、先程までの緊張した気分は次第にほぐれてきた。

嵐山——高雄のコースは、別に取って置いていとも思わなかつたが、若葉が柔らかい光沢をたたえて新入生である私達を象徴しているかのようであつた。途中、長く暗いトンネルを通つたが、私達は手をしっかりと握りあいながら、凹凸の見えない悪い道を歩み進んで行つた。時おり冷たいしずくが落ちてきて、私達に子供のような奇声を発せさせた。また、ひつきりなしに通る自動車は、あわててよけ

ようとする私達の足を水溜りに突込ませた。

そして、約十分後（実際にはもつと長く感じられたが）、眼前に明るい山あいの道がひらかれてきた。そこで昼食を済ませ、自己紹介があつた。親睦の目的で行われたこのハイキングも、女子多数の不参加で十分意を達せなかつたように思われて残念だつた。私達は、上級生の男子と親しく話し合えて得るところも多かつたけれども、大学生活を一年でも多く経験された同性の先輩について知りたかつたし、また種々話し合いたかつた。とはいへ、入学以来他の学生との接触もなく、毎日講義を聞いて帰るだけの単調な寂しい大学生生活を少しでも打破してくれたという点で、このハイキングは成功であつたと考える。そして、これを機に上下のつながりはほぼうまうまといつたが、今度は横の結びつきがうまくいくように何らかの方法をとらねばならないと痛感した。参加してよかつたという後味のよい思いを胸にして私達は午後三時頃帰途についてた。

（生信和子
中西美智子）

一回生

クラスハイキング（洛北）

私達一行は、六月十四日午前十時、わたつみの像前に集合した。河原町通り、賀茂大橋をぞろぞろと歩き京福電鉄の出町柳から八瀬の電車にのる。修学院駅で下車すると、今日のハイキングの指導をお願いした国崎先生がニコニコ顔で待っていていられた。比叡山がきれいながめられる高野橋を渡り、川に沿つて宝ガ池公園へ向う。全く人氣のない木々のおいしげつた寂しい小道を、川の流れを聞きながら進む。新緑の木々でおおわれた小道をぬけると、ひろびろとした田園地帯に出る。国立国際会議場の建設地あたりから静かな水面がみえてきた。宝ガ池である。日曜日のせいか、多勢の人がボート遊びや魚つりをしている。私達は、茶店でゴザをかり、なだらかな丘陵にかこまれた美しい水面をながめながら弁当を食べた。昼食後、男子は先生をかこんで苦しかつた受験時代の事や友人の事などをはなしあう。女性はボートをのりに行く。午後一時、茶店のおじさんに礼を言つて宝ガ池を後にし、今日の行程で一番苦しいクジラ

山をのぼる。きれいなつつじをながめながら頂上につくと、京都の市街がほとんど全部見わたせる。足をすべらしながら岩道をくだると、松ガ崎大黒天に着き静かな境内を通りすぎて広いアスファルト道路へ出た。

強い日差しを受け、比叡山を眼前に二十分位歩きつづけると、修学院離宮の正門にたどり着いた。日曜日で拝観中止。しかたなしに裏門の林丘寺あたりからながめるだけ。田畑を左右にしながらよく手入れされた小松の茂る白砂の道がすばらしい。内部の茶室や庭園は、さぞかしりつぱだろうなあ、と想像しながら離宮を去る。これより天台宗の曼殊院に向う。歌を口ずさみながら竹藪のトンネルをぬけると崩れかけてよこれた曼殊院の白壁が見えた。院内へ入ると「御用の方はつりがねを二つ打つて下さい」と、薄暗い天井からハリ紙がしてなる。「カン、カン」と威勢よくたたくと、奥の方から若い女の人があらわれた。立命館の日文の者だと告げると気持ちよく迎えてくれた。広い部屋におおされると、全員やれやれと、腰をおろす。女性達は足を虫にかまれて閉口していた。十分位休んでいると中年の女の人があらわれる。私達に説明し

てくださった大谷大学の白戸さんだ。重要文化財である小倉院で会見の間、黄昏の間、富士の間、その他いろいろな部屋をつぎつぎと拝観する。あまりに部屋がたくさんあるのでだれかが「これでは家の中で迷子になる」とこぼす。又名勝に指定された庭園、国宝になつたいろいろな不動像や曼殊院本を見てもらう。最後に八窓の茶室に案内される。小さな古ぼけた窓が八つあり、室内には三百年前の人々が種々の手工をこらしていた。狩野探幽の襖画や谷崎潤一郎のサイン入りの吊鐘をながめながら出口に行く。しかし残念なことに大書院は改築中とのことで拝観出来なかつた。私達は曼殊院での拝観時間を、二十分位と計画していたが、白戸さんの熱のはいつた説明でとうとう計画を変更、五十分近くここにどまり曼殊院を去つた。ここらあたりは市内という感じがせず、山が目前にせまり白戸さんの説明を聞いている時なども驚が伴奏してくれした。少し家の立ち並んだ道をすぎる

と詩仙堂についた。受付は非常に多くの拝観者で混雑している。きれいに手入れされた人工的な庭をながめて説明者を待つているとなりの部屋で異様なさけび声がしてくる。のぞいてみると約二十人の人が薄暗い仏前で詩吟をやつていた。しかしその声は本当にふき出したくなるような変な声だつた。詩吟がわると頭をきれいにすつた人が説明を始めた。詩仙堂は、詩人石川丈山の隠棲した跡で彼が漢、晋、唐、宋の詩家三十六人の肖像を狩野探幽に描かせ、各詩人の詩を丈山自ら書いて四方の壁に掲げたところから詩仙堂とよんだそうである。説明を聞いた後、私達はそうりをはいて庭へおりた。そこできれいな花をバックに写真をとる。詩仙堂を出ると時刻は午後四時をすぎている。私達の計画ではまだ金福寺の芭蕉庵や蕪村の墓さらに銀閣寺まで行くことにしていたが、おそくなつたので金福寺には行きたい者だけ行くことにし、一応ここで解散にし、国崎先生とも別れた。しかし、ほとんどの者が金福寺まで足をほこんだ。拝観料三十円とはりがみがしてあつたけど無料にしてもらう。さびしそうな藁屋根の小さな芭蕉庵や「蕪村の墓」を見終つて一乗寺駅へついたのは五時近かつた。全員足がたくたで早く家へかえりたいような姿だつた。

（清水蔵三郎）